

近代歴史地理学への異次元からの視角と 新しい研究アプローチ

— 鷺崎俊太郎報告と米家泰作報告によせて —

矢ヶ崎 典 隆

1. 歴史地理学者にとっての時代と地域

歴史地理学という学問領域と歴史地理学の研究動向を理解するための前提として、歴史地理学者が共有する時代と地域へのかかわり方に着目することが重要な意味をもつと筆者は認識している。すなわち、研究対象とする地域と時代に歴史地理学者がどのようなこだわりを持っているかということである。

日本の歴史地理学界では、歴史地理学者は主に日本を対象として研究を行ってきた。すなわち、歴史地理学者は日本という地域に強いこだわりを維持してきたわけである。歴史地理学会の学会誌『歴史地理学』の目次を見れば、歴史地理学の研究とは日本の歴史地理学の研究を意味するということが容易に理解できる。

一方、時代についてみると、歴史地理学が対象とするのは古代から近代までである。そして歴史地理学者は時代ごとの専門家集団に分化している。すなわち、歴史地理学者は古代、中世、近世、近代のいずれかを専門とする研究者である。ただし、古代、中世、近世とは異なり、近代については、歴史地理学者以外の人文地理学者も研究に参画するという特徴がみられる。それは、人文地理学者のなかには、現代の日本を地理学的に研究する際に、その発展過程を遡ると近代が重要な意味を持つと認識する人々が少なくないからである。

時代と地域に着目すると、地理学および隣接する歴史学や地域研究との関連における歴史地理学の位置を概観することができる。図1は、縦軸に地域を、横軸に時代を設定し、学問領域が研究対象とする時代と地域を概観するものである。

歴史学者は地域と時代を限定的に研究する。日本史、東洋史、西洋史は大きな分業体制の枠組みであるし、それぞれにおいて、時代による専門分化が進んでいる。日本中世史を研究する歴史学者は、日本の古代、近世、近代を研究することはないし、ましてや西洋史を研究することはない。西洋の古代史の専門家は日本史や東洋史に口出しすることはない。日本史、東洋史、西洋史は、研究課題、研究法、研究資料において異なる分野であり、専門分化が著しい。

一方、地域研究と呼ばれる研究分野においては、研究対象とする地域への専門分化が顕著である。地域研究の基礎となる言語によって研究者の守備範囲が規定される。研究対象とする時代は研究者や地域の特性を反映して多様である。例えば、ヨーロッパ研究は言語ごとに細分化されている。北アメリカについては、カナダとアメリカは別々の専門家が研究している。ラテンアメリカ研究でも、スペイン語地域とポルトガル語地域に大きく分かれるが、スペイン語地域ではさらに地域ごとの専門分化が進んでいる。

地理学においては、地域の設定が前提とな

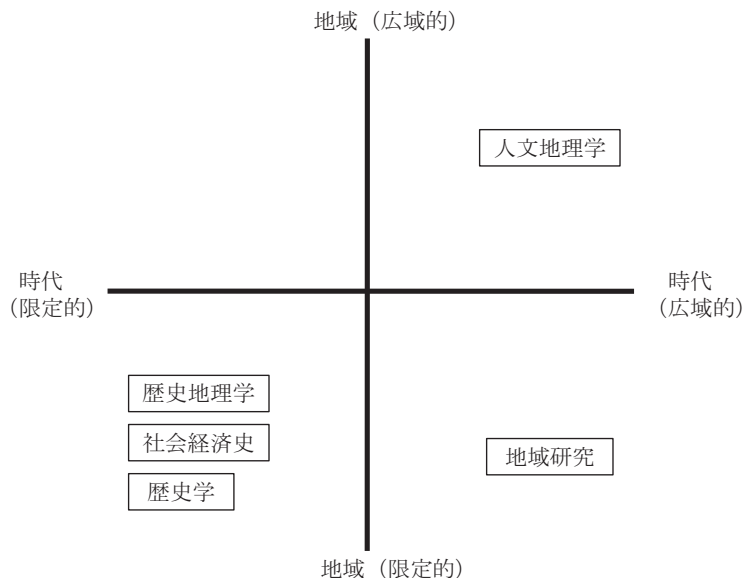


図1 地域と時代の枠組みからみた学問領域

る地誌学よりも、系統地理学が主流であり、研究課題や研究方法に応じて多様な地域が研究対象となる。歴史地理学者を除くと、一般に人文地理学者は地域と時代に関するこだわりが弱い。彼らは、特定の地域にどっぷりつかってその地域の地域性を描き出すというよりも、グローバルな視点にたって、地理的事象の比較研究に強い関心を寄せる。多くの人文地理学者は、主に現代を研究対象とするが、現代を論ずるために近代からの展開に関心を寄せる研究者もみられる。学会誌『歴史地理学』には、近代を対象とした人文地理学者の論考が少なからずみられる。

歴史地理学者は、日本という地域と古代から近代までの時代を限定して研究するので、歴史地理学者と歴史学者は地域と時代に関するこだわり意識や研究の発想を共有する。一方、人文地理学者は地域と時代に関するこだわりが弱く、系統地理学的な発想が強く、グローバルな比較研究への関心が高いので、歴史地理学者と人文地理学者の距離は大きい(図1)。以上から、地理学研究者のなかで歴

史地理学者はユニークな存在である。地域と時代の枠組みは、日本における歴史地理学の研究史を把握するためにも、また今後の歴史地理学研究の展開を検討するためにも重要である。

II. 異次元からの視角—近代史研究者からみた近代の歴史地理学—

鷺崎俊太郎報告「歴史地理学—日本経済史間の学際的研究史：趨勢と課題」は、1960年代中頃から1980年代初頭にかけて活躍した二人の研究者に焦点を当てた研究である。一人は社会経済史を専門とした梅村又次であり、もう一人は歴史地理学者の黒崎千晴である。二人はそれぞれの分野においてアウトサイダー的な存在であったが、互いに影響しあって、日本の近代に関する研究に新しい方向性を示したと指摘される。鷺崎による梅村又次と黒崎千晴の評価は次のように要約することができる。

梅村又次は、1950年代前半に労働経済学から出発し、1960年代後半に『長期経済統計』

の監修にかかわったことを契機として、近世と近代という二つの時代の連続性に関心を寄せるようになった。そして、近世から近代への移行期という日本経済史研究における空白の時代の研究に取り組むようになったと指摘される。近世と近代との間に研究のギャップが存在したこと自体が、時代ごとに分断して異なる専門家が研究するという、歴史学的な発想と専門分化の特徴を示すものであると私は感じる。

梅村の研究スタイルの特徴は、人口学、地理学、地域研究など、隣接分野の研究法や研究成果に関心を寄せたことであるという。そして、1970年代に入ると、梅村は数量経済史研究会において中心的な役割を演じるようになった。そして数量経済史の研究においても、地理的および地域性に関する認識を発展させたという。

一方、黒崎千晴は、明治期における各種の統計史料を発掘し、計量的な歴史地理学という新しい分野の創設に貢献したと評価される。黒崎は、他の地理学者とは異なり、地理学に批判的な立場を貫き、研究活動や交友関係の中心は社会経済史学にあった。そして黒崎の主な研究業績は『社会経済史学』や『数量経済史論集』に公表されたという。1967年から1974年にかけて、明治時代の運輸革命、工業化、都市について、『社会経済史学』に3本の論文を発表した。

1970年代の数量経済史研究会の研究活動を通じて、梅村と黒崎は親交を深めるとともに、研究会において長老的な存在であったという。梅村は農業開発にも関心を寄せ、地理学者の研究成果や研究の視点をを用いて、社会経済史の研究を深めた。梅村が研究を展開するうえで黒崎の研究は大いに刺激になったと評価される。

報告者の鷺崎は、最後に、学際的な研究に対する課題として二つの点を指摘した。歴史地理学から社会経済史へのメッセージとし

て、地図の活用、すなわち空間的な視点を導入することの有効性を強調した。一方、社会経済史から歴史地理学へのメッセージとして、マクロな研究に展開するフレームワークの構築を課題としてあげた。

梅村と黒崎が活躍したのは1960年代中頃から1980年代初頭までの時代であった。その後、近代を対象とする歴史地理学研究は新しい展開を見せる。梅村と黒崎というアウトサイダーの存在は、近代の歴史地理学研究の展開にどのようなインパクトを与えたのであろうか、それとも大きな影響を与えなかったのか。1980年代以降の近代歴史地理学の展開において、二人のアウトサイダーの存在はどのように評価されるのであろうか。

地理学は、他分野からの影響を常に受けてきた。さまざまなアイデアが隣接分野から導入され、地理学的に試されるというのが日本の地理学の伝統になった。この点では、社会経済史に影響を及ぼした黒崎の存在は大いに評価されるべきであろう。しかし、黒崎が地理学界に関心を示さなかった結果、黒崎の研究は地理学界では十分な評価を得るには至らなかったように思われる。

そこで気になるのは、黒崎がどうして地理学に批判的であり、地理学界から距離を置いたのかという点である。一つの理由として考えられるのは、明治期における統計史料を発掘し、それに基づいて近代日本の地域性を解明しようとした黒崎にとって、地理学よりも社会経済史において心地よく研究できたためかもしれない。すなわち、日本の近代という、地域と時代を限定して研究した黒崎は、社会経済史や歴史学を研究する研究者と認識を共有していたのに違いない。黒崎にとって、近代日本を他の地域と比較したり、世界の近代化という大きな変化の枠組みにおいて考察するという発想は存在しなかったのであろうか。少なくとも黒崎の著作目録¹⁾を見る限り、そうした発想の広がりを認めることは

できない。

黒崎が地理学界に大きな関心を示さなかったもう一つの理由は、歴史地理学研究の拠点である筑波大学の助教授に就任したのが50代半ばを過ぎてのことだったことと関係しているように思える。黒崎は長い間早稲田大学高等学院に勤めていたので、地理を教えていても、研究を組織的に推進したり研究者を育成する立場にはおかれていなかった。また、地理学会の運営に携わる立場にもなかった。

黒崎は1979年に筑波大学歴史人類学系に移ってから、その紀要である『歴史人類』に3本、『歴史地理学紀要』に2本の論文を発表した。また、歴史地理学会会長を務め、会長講演は「文明圏と破砕帯」として公表された²⁾。筑波大学に奉職してから歴史地理学界での仕事が増え、黒崎と地理学界との間の距離が急速に縮まったように見える。しかし、黒崎が歴史地理学の方向性に影響を及ぼすためには時間が短かすぎた。会長講演は新しい歴史地理学の方向を示唆したと読めるが、その後、このテーマを研究することはなかったようである。

黒崎が地理学界から距離をおいた3つ目の理由は、当時の歴史地理学の研究動向と関連しているように見える。すなわち、歴史地理学とは古代、中世、近世を対象とする地理学であるという認識が一般的で、1970年代の歴史地理学界では近代を扱う歴史地理学者はマージナルな存在であったのかもしれない。1980年代に入ると、人文地理学者が日本の近代の研究に取り組むことによって研究が活発化したし、近代化の意味も問われるようになった。

Ⅲ. 新しい「近代歴史地理学」の展望

米家泰作報告「『近代』概念の空間的含意をめぐって—モダン・ヒストリカル・ジオグラフィの視座と展望—」は、歴史学で常識的に使われる時代区分をそのまま受け入れてよ

いのかという疑問を背景に、時代区分の意味を問い直す試みである。歴史地理的な「近代」とはどのような現象を指しているのかが検討される。そして、歴史地理学は何に「近代性」を見出すのかを問うている。すなわち、新しい歴史地理学、すなわち、心象的歴史地理の試みである。米家報告の議論を要約すると以下ようになる。

「近代」という認識を地理的文脈で読むことを目的として、そのために場所の間の関係に着目する。すなわち、地理(空間)的差異は時代(時間)的差異として読み換えられる。他者を前「近代」的とみなして、自己を「近代」的とみなす心象地理の構図があり、それは、場所と場所が広範に結びつく過程において生じてきたことに着目する必要性が強調される。こうした認識は、さまざまな地域スケールにおいて生じた。

近代における「近代」意識は、社会の発展段階のなかに自己と他者との関係を位置づけようとする人間の意識の表れであると解釈される。そして、自己の過去を他者に見つけ、将来は他者が現在の自己の段階になり得るといふ進歩の可能性を認めるという認識がみられる。こうした発展段階における近代の認識は、日本の中心と内陸(山村)との関係において、また、日本と周辺諸国(朝鮮半島)との関係において、心象地理を分析することによって明らかになる。以上が、米家報告の要約である。

歴史地理学にとって時代区分は何を意味するのだろうか。米家報告は、研究の枠組みとしてまず時代を設定し、地域を歴史地理学的に検討するという従来の方法について再考を促した論考ともいえる。地域は連続し、互いに関連しあっている。また、時代は連続しており、時間とともに地域は変化している。近世から近代への移行、そして近代という時代における変化、さらに近代から現代へという変化は、いずれも連続的に生じる。近代の特

徴といえる近代性は、地域によって進展の度合いが異なる。

「近代」という時代認識は、固定的な時代区分ではなく、時間と地域のスケールを導入することによって、よりダイナミックに、また、より心象的に検討する必要性を主張するという点で、米家報告は有意義であると思う。また、「近代」を論じる際に、新しい視点でアジアという地域の枠組みで近代を論じる可能性を示唆したものと評価される。なお、日本における「近代」は、他の時代区分、古代、中世、近世などの時代区分とは異なる意味をもつと解釈できるのだろうか。

米家が提唱する心象歴史地理学の試みが新たな発見と研究成果を生み出すことができるのかどうか、今後の具体的な研究の蓄積に期待したい。

IV. グローバル歴史地理学の構築に向けて

21世紀の歴史地理学はどのようなゴールに向けて展開するべきであろうか。鷺崎報告と米家報告の成果を踏まえて、次のような提案をしたい。

従来、わが国の近代歴史地理学では、日本という地域（いわゆる大日本帝国の版図）における近代という時代の枠組みを設定して研究が行われてきた。図1に示したように、歴史地理学は歴史学と類似のスタンスをとってきたわけである。しかし、国境を越えたグローバルスケールで日本の近代を検討すれば、さらに新しい発見がなされるだろうし、わが国の日本の近代をグローバルな枠組みに位置づけ、評価することができる。それが新しい近代歴史地理学の発展を促進することは間違いない。日本の近代歴史地理学に欠けてきたのは、より広い研究の空間的枠組みの中で日本の近代を評価し直すことである。

19世紀後半から20世紀前半までの時代は、世界中で大きな変革をもたらされた時代であった。それは、人、物、資本、技術、アイ

デアなどがグローバルに移動し、それまでの伝統的な社会、経済、文化がダイナミックに変化した時代であった。

人の移動についてみると、日本人の海外移住はまさに近代の人口移動現象であり、ハワイ、そして南北アメリカへの移住が盛んであった。移民史研究では、日本人の海外移住を通して日本の近代を解釈しようとしてきたが、移民は移住先のホスト社会にさまざまな影響を及ぼしたし、移住先の地域変化にさまざまな役割を演じた。すなわち、移民の歴史地理学研究を展開することによって、従来の移民史が対象としなかった新しい研究領域が開けてくるのである。

もちろんこのような近代の海外移住は日本に限定された人口移動現象ではなかった。ヨーロッパからは大西洋を越えて南北アメリカへ多くの人々が渡った。アジア諸国からの南北アメリカへの人口移動も並行して進展した。このようなグローバルな人口移動とそれに伴う地域変化は、近代歴史地理学の魅力的な研究領域である。

近代には、人間が移動するとともに、資本の移動も活発化した。特に、イギリスを中心としたヨーロッパ資本の南北アメリカへの導入は、そこにおいて新しい産業の展開を引き起こした。砂糖産業、綿花産業、鉄道建設など、ヨーロッパ資本を基盤として新しい産業が誕生した。また、アメリカ資本のラテンアメリカへの導入が、バナナ産業や砂糖産業のように、新しい土地利用を作り出した。資本の移動が人口移動を活発化させる要因となったことは言うまでもない。人や資本の移動とともに、技術やアイデアも活発にグローバルに移動するようになった。

人、物、資本、技術、アイデアの移動に伴うグローバルな地域変化は、世界中で共通のしくみに基づいて展開した。同時に、それぞれの地域の地理的特徴を反映して、地域変化には地域差も生じた。日本の近代化も、そう

したグローバルな変化の枠組みに位置付けることによって、よりの確に説明することができるだろうし、この事例がグローバルな近代の地域変化を検討するための素材を提供することにもなる。日本的な近代化のプロセスとそれに伴う地域変化は、まさに日本の固有性を表している。

グローバルな枠組みにより近代化に伴う地域変化を考察することによって、地域間の関係をよりダイナミックに説明することができる。日本の近代化は、アメリカ、ヨーロッパ、ハワイの同時代の変化とどのように関連し合っていたのだろうか。

いくつかの事例をあげてみよう。サトウキビプランテーションシステムは、熱帯各地において、19世紀末から20世紀初めにかけて、小規模製糖工場（ブラジルではエンジェーニョと呼ばれる）から、大規模中央工場（ブラジルではウジーナと呼ばれる）へと変化した。製糖業の近代化を実現するために、資本や労働力の移動が活発化した。日本からハワイへの移民が活発化したのもこの時代であった。一方、アメリカでは、ヨーロッパからテンサイ栽培と製糖業の技術や施設が導入され、西部で新しい製糖業が展開した。ボルガジャーマン（ロシアから移住したドイツ系の人々）や日系移民は製糖工場へのテンサイの供給に重要な役割を演じた。

南アメリカにおける綿花栽培地域もこうした広域な交流の結果として形成された。ブラジルにおける綿花栽培は、アメリカの南北戦争を契機として、イギリス資本の流入にともなって、鉄道建設とともに進展した。サンパウロのコーヒー産業を労働者として支えたのは、イタリアや日本からの移民であった。19世紀後半に進展したカリフォルニアのセントラルバレーの小麦産業は、イギリスのリバプール市場向けに発達した。アルゼンチンのパンパにおける農業の集約化と牧畜業は、冷凍技術の導入を背景として、イギリス市場向

けに進展した。

以上のように、近代においては、世界各地でさまざまな新しい形態の農業が展開し、土地利用が大きく変化するとともに、資本、技術、人間が広域に移動することにより、大きな地域変化が生じた。

近代には新しい形態の都市が誕生した。生産活動の場としての伝統的な都市ではなく、保養という消費活動を目的とした保養都市が環境に恵まれた場所に形成された。その背景には、鉄道の建設が進展し、それを利用した旅行が盛んになったというインフラの整備があげられる。また、ギリシア時代から続いていたミアズマ病因論を克服することが難しく、気候の適地における転地療養が依然として富裕層にとって重要な意味を維持した。結核療養のためのサナトリウムが各地に建設され、医療気候学は転地療養の適地を探す上で重要な役割を演じた。

こうして、アルプスには保養都市が建設された。アメリカでも、南カリフォルニアに代表されるように、保養都市の建設が進んだ。保養と消費が主な都市機能である保養都市は、都市の立地ばかりでなく、社会のあり方に大きな影響を及ぼした。こうした保養都市は近代における都市発展にとって重要な役割を果たしたのであり、人々の健康に関する考え方、そこに特有の情報や社会、そして人々の生活の仕方など、グローバルスケールで同様の進展がみられた。保養都市については、個々の事例を研究することも重要であるが、近代という時代の枠組みにおいて再検討する必要性は明らかである。

日本の歴史地理学は、自国の近代に着目して、地道な研究を蓄積してきた。そうした研究の実績を踏まえて、近代歴史地理学がさらに発展するためには、グローバルな枠組みのもとで日本の近代を再検討する必要がある。そのためには、19世紀後半から20世紀前半にかけて世界で展開した新しい変化の枠組みを

検討し、地域変化の共通のしくみとローカルな地域変化の地域差に着目する必要がある。そして、ローカルな地域現象とグローバルな動向を結びつけるとともに、地域間のダイナミックな関係に目を向ける必要がある。

日本の近代化を日本という閉じた枠組みで研究してきたのが従来の歴史地理学であった。21世紀の歴史地理学では、近代日本の歴史地理を世界的な変化の文脈に位置付ける必要がある。そのためにはグローバルな研究の視点と枠組みが必要であり、より広い時代（時間）と地域（空間）を設定して、日本の近代の歴史地理を再検討することが期待され

る。そうした研究を蓄積し、歴史地理学界の総力を結集して「近代（近代化）のグローバル歴史地理学シリーズ」を刊行することを提案する。そこには地理学にとって魅力的な研究フロンティアが存在するのである。

（東京学芸大学）

〔注〕

- 1) 「黒崎千晴教授略歴・主要著作目録」国際研究論集（秀明大学国際研究学会）11-4, 1999, 181-183頁。
- 2) 黒崎千晴「文明圏と破碎帯」歴史地理学 138, 1987, 1-13頁。